

英語文学読解指導の遅延テストにみる 空間表現身体化の定着

熊田 岐子
(2015年10月5日受理)

The Consistency of the Embodiment of Spatial Expressions on Delayed Tests
in Reading Instruction Using English Literature

Michiko Kumada

Abstract: Using literary texts in English education in Japan has come under question in general. Literary texts, however, have a strong relationship with the linguistic systems of everyday English language. This study has shown the reading instruction of literary texts with reference to cognitive linguistics. The instructions were 1) grammatical instruction with illustrations of schemas and Japanese translation by a lecturer, 2) drama activity in groups, 3) watching a film adaptation, 4) writing learning assessments. This paper aims to clarify whether students 1) draw the illustrations of the schemas of target spatial expressions which were given instruction during reading instruction, 2) understand from target words other related spatial expressions, and 3) extend prototypes to their psychological meanings. The experimental group (41 university students) were asked to draw illustrations of spatial expressions, and then to add their explanations and English examples to their illustrations in a delayed test performed 5 months after reading instruction. Students were divided into two groups, an experimental group and a control group. This paper showed that 1) the experimental group made more illustrations of schemas for target words than the control group did, 2) the experimental group understood from the target words other non-target words, and 3) a few subjects of the experimental group extended the prototypes to their psychological meanings.

Key words: understandings of spatial expressions, schema, prototype, extension
キーワード：空間表現理解、スキーマ、プロトタイプ、拡張事例

1. はじめに

日本の英語教育において、文学の使用は一般的に疑問視されている。文学は、語の反復や変奏、メタファーやメトニミーなど様々な言語的資源とその表現性が追

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：中尾佳行（主任指導教員）、柳瀬陽介、
築道和明、山元隆春

求されており、学習事項に合わせたリーディング教材として作成あるいは編集されていないからである。しかし、文学のメタファーやメトニミーは、Lakoff & Johnson (1980) が指摘するように、日常言語の概念体系に根源的に関連し、その延長線上にあるものである。文学は、社会・文化的背景、作者の意図、語り手や登場人物の言語に含める意味合い、さらには読み手による読みの拡張等、言語が複層化されており (Leech & Short, 2007)、虚構とはいえ現代社会に通じるリーディング教材としての価値を多分に潜めている。文学

教材のこのような可能性を踏まえ、本研究では、認知言語学の知見を取り入れて、on や at などの空間表現を読み取る視点として、登場人物の心理を読み取る読解指導を提示した。この読解指導においては、空間表現の持つ身体性を重視することとした。空間表現の身体性とは、視覚・聴覚などの五感を中心に人の身体に備わる機能を通じて、空間関係を認知することができることである (cf. Gibbs, 2005; Tyler & Evans, 2003; 山梨, 2012)。

認知言語学を援用した文学を使用する読解指導として、これまでの研究において、以下4点の指導(1時間半×13回)を45名の英語学習者(大学生)を対象に実施した。実施科目は、英語教職課程の1年生用専門基礎科目であるため、一般英語教養の要素も持つ科目である。45名は①30名(教育専攻の大学1年生23名・2年生2名・3年生2名、体育専攻の大学1年生3名)、②15名(教育専攻の大学2年生)の2クラスに分けられていた。英語力に関しては、①クラスは初級レベル、②クラスは中級レベルである。①②クラスに対して、1)教師によるスキーマ提示を含んだ空間表現を中心とする文法指導・日本語訳の口頭説明、2)グループ単位での劇発表、3)映画視聴、4)学習ポートフォリオの記載を基本とした指導を実施した。本指導(4~7月実施)により、空間表現理解と文学を通じた読みに一定の効果が見られた。空間表現身体化の動き、つまり、動作や位置などを物理的に、また感情や感性などを心的に、空間表現と関連付けて理解する特徴が確認できた。本研究で目指している空間表現理解とは、最終的には、空間表現をスキーマに基づいてプロトタイプ・拡張事例へと具体化し、プロトタイプから拡張事例へと応用させて、スキーマの抽象性を高め、さらに様々な拡張事例を生み出すことを示している。空間表現は、日本語と英語では一対一に対応しないため、日本人学習者にとってはその習得が難しい文法項目でもある。この状況を踏まえて、安藤(2012)や瀬戸(2007)などに見るように、プロトタイプと関連させながら空間表現の意味拡張までを細やかに取り扱う必要がある。

本稿は、これまでの研究の一環にあり、読解指導後、一定期間を置いて遅延テストを実施し、空間表現身体化の定着に焦点を当てて検討したものである。次の3点を検討対象とした。第一に、指導項目であった target word はスキーマ図が描ける段階に至っているか。第二に、target word の理解が、他の空間表現理解に応用できるか。第三に、target word の字義的な意味を、心理的な意味へと拡張できるか。本稿においてこの3点を分析することによって、本節で示した4

点の指導効果として、指導後にもスキーマが持続され、拡張事例へと広がりを見せるかを明らかにしたい。

2. 研究背景

2.1 空間表現理解

空間表現とは、日常言語の概念体系の本質である空間関係を、書き言葉や話し言葉に言語化したものである。品詞としては、on などの前置詞や down などの副詞が当てはまる。この空間関係を言語化した空間表現の意味ネットワークは、人の認知プロセス(山梨, 2000:181)で表せる。山梨(2000)によると、スキーマが事例化した最も際立ちのあるものがプロトタイプ、プロトタイプが拡張して拡張事例を、さらには拡張事例が繰り返し産出されることで、スキーマの抽象性を高め、さらに多様性のある拡張事例へと広がりを見せる。多様性のある拡張事例には、時間・心理面などにも適用される抽象的な事例も含まれる。スキーマとは、例えば、容器は丸などのように具体的な際立ちを無くした抽象的なイメージを指す。スキーマの抽象度が高いほど、柔軟性があり、プロトタイプから拡張事例へとシフトしやすくなる。

これまでの研究結果として、読解指導前・読解指導後に45名を対象に実施した4択の空間表現テスト結果を使用する。空間表現テストは、読解指導で使用した文学教材である *Alice's Adventures in Wonderland* において、頻度が最も高かった of, in, at, on を問う36問のテスト(紙面の都合上省略)である。指導前・指導後のテスト平均値に、有意差が見られた($t=3.37$, $df=44$, $p<0.05$)。さらに言えば、44名(データ欠損1名)から収集した学習ポートフォリオにも、空間表現理解が進んでいる様子が記述として表れていた(熊田2013a)。学習ポートフォリオには、各回で、活字的にとどまっていた空間表現を、例えば劇活動を通じて in や at にこだわりを見せ、どのような動作なのか、何を意味するのかを深く考える様子が見えた。

2.2 文学的な読み

ここで述べる文学的な読みとは、空間表現を基に登場人物の動作や位置関係を把握し、人物が何を考えているのか、人物間にはどのような関係があるのかを考えながら読む方法である。例えば、*Alice's Adventures in Wonderland* に登場するマッシュルームに乗っている大きな青い芋虫と小さくなってしまったアリスの様子が描かれる場面では '[Alice] peeped over the edge of the mushroom' と表現されている。ここで、弧を描く over が使用されている理由は、アリスが小さいということを強調しているからだと考え、会話も踏ま

えて、二人には社会的に見て上下関係があるのではと感得する。これが、いわゆる文学的な読みの一つである。

この研究結果としては、熊田（2014）において、文学的な読みが指導を繰り返すごとに深まっていく様子を量的に数値化して提示した。また、文学的な読みが深まっていくなかで、読解指導で用いた映画の記述の減少化が起きたことを報告した。これは、映画に頼ることなく、学習者が空間表現に基づいた自分なりの読みをするようになったということである。文学的な読みは、空間表現を基にして心理的な意味合いを広げ、結果多義性を持った読みを作り出した。

3. 研究課題

第2節で述べた研究結果から一定期間（5か月程度）を経過して実施した遅延テストに基づいて、空間表現身体化の定着について検討する。以下の3点を研究課題として取り扱う。

- 1) 指導項目であった target word のスキーマ図が描けるか。
- 2) target word から、他の空間表現理解へと進むのか。
- 3) プロトタイプのな字義通りの意味から、拡張事例の一つである心理説明へと進むのか。

4. 空間表現の定着

4.1 調査協力者

本稿第1・2節の検証に参加した45名のうち、後期開講の2科目、英米文学に関係した科目とメディアに関係した科目から、各々1科目を選んで受講した25名（S1～S25として個人を表記する）を、読解指導を受けた実験群とし、読解指導効果の定着を検討する。実験群25名のうち、本稿第1節で説明した読解指導の①クラスであった協力者は13名、②クラスからは12名である。また、同2科目のどちらかを受講していた本稿第1・2節の検証に参加していない16名（S26～S41として個人を表記する）を統制群とする。なお、統制群は、一般英語科目、場合によっては英語教職課程科目等は受講しているが、空間表現に関する本読解指導を一切加えていない本調査のみの協力者である。

事前テストでの of, in, at, on を問題とした空間表現テスト36問の結果を見ると、統制群は、実験群の読解指導前の空間表現理解とほぼ同質である（ただし、事前テストにおいて at 1問の選択肢に誤りが見つかったため、統制群テスト時には訂正してある）。指導前

実験群平均値16.92点、統制群平均値17.75点であり、平均値間に有意差は見られなかった ($t=0.44$, $df=39$, $p>.05$)。実験群と、実験群指導前とほぼ同質である統制群とを比較することにより、実験群が指導を介していかに変容したかが明確になる。

4.2 分析材料・方法

分析材料として、第一に、空間表現イメージテスト（以下、イメージテスト）を使用する（資料1）。イメージテストは、16問構成であり、問となる空間表現のイメージを図にし、それに文例を加えて説明するテストである。文例がなければ、どのような図を描いたのが判定しにくい。問は、Leech & Svartvik（2002）の5つの視点に基づいて選択した。Leech & Svartvik（2002）によると、人は対象物を、図1A）～E）の5つの視点のいずれか、あるいは視点を重複させて見ている。

下記の5つの視点に区分された空間表現のうち、読解指導で扱ったものは target word とし、指導を加えていない空間表現は non-target word として定めた（表1）。

また、target word が実験教材（*Alice's Adventures in Wonderland*）の使用範囲に表れた回数は表2の通りである。表2の下線は、読解指導の1）教師によるスキーマ提示を含んだ空間表現を中心とする文法指導・日本語訳の口頭説明において、焦点を絞って指導した空間表現である。

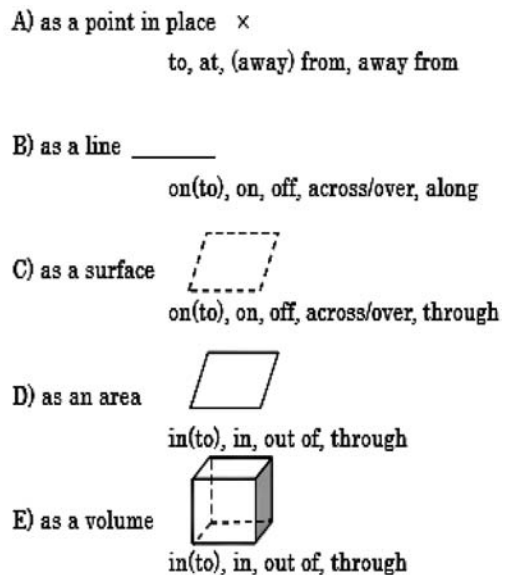


図1 Leech & Svartvik（2002：93-96）を本稿の筆者がまとめ直したものの

表1 イメージテストの間となる空間表現

5つの視点	target word	non-target word
A) point	at, away, to	from
B) line	on, off, across, over	along
C) surface	on, off, across, over	through
D) area	in, into, out of	through
E) volume	in, into, out of	through
その他)	down	between, above

表2 実験教材で使用範囲に表れた空間表現頻度
(下線は指導済みの空間表現)

頻度 順	語	頻度	頻度 順	語	頻度
1	<u>of</u>	62	14	<u>about</u>	5
2	<u>in</u>	41	15	<u>off</u>	5
3	<u>at</u>	28	16	<u>round</u>	5
4	<u>on</u>	26	17	upon	5
5	<u>to</u>	20	18	<u>out of</u>	4
6	<u>down</u>	17	19	<u>under</u>	4
7	for	16	20	<u>across</u>	3
8	<u>with</u>	15	21	<u>away</u>	3
9	up	13	22	near	3
10	<u>by</u>	8	23	from	2
11	<u>into</u>	8	24	among	1
12	out	8	25	between	1
13	<u>over</u>	8			

分析材料として、第二に、実験群・統制群の回想インタビュー（以下、インタビュー）を使用する。インタビューは、実験群は7月実施の指導後空間表現テスト結果を基に、統制群は4.1で使用した空間表現テスト結果を基に、上位・中位・下位に分けて各2名を対象に実施した。インタビューには時間がかかるため、協力者の負担を考慮して、上位・中位・下位の中でも、部活動やアルバイトなどの時間的制約が少ない者に依頼した。本インタビューは、半構造インタビューであり、面接者一人：協力者一人の個人面接法を取った。個人面接法は、相手に警戒心を持たせないという利点がある（鈴木、2002）。質問項目は、イメージテストに関して、1）特に印象に残っているのはどの空間表現か、なぜ印象に残っているのか、2）自信がない空間表現はどれか、どのように迷ったのかである。インタビューは、イメージテスト以外の質問項目と併せて一人20～25分程度で行い、客観的な記録のために、個人の承認を取って音声録音を行った。インタビュー後、音声ですべて筆記データ化した。

分析方法として、イメージテストの図・文例の記述、

インタビュー記述を基に、実験群上位・中位・下位の傾向性、統制群の傾向性を質的に分析する。

4.3 結果

4.3.1 Target word のスキーマ図

イラストの特徴として、正解・不正解に関わらず描かれた図のうち、抽象的な図、つまりスキーマ図は、実験群で約88%、統制群では約68%であった。実験群・統制群間には約20%の差が見られる。付け加えると、図が描かれている空間表現が、実験群は全問400問中330問と約83%であるのに対し、統制群は全問256問中169問と約66%であった。問題総数の違いは、実験群・統制群の協力者数が異なるためである。この結果からは、実験群と比較して、統制群の方が空間表現の図が描けなかったとも言える。

以上の点を踏まえた上で、実験群が描いた図の詳細を見てみると、実験群上位・中位・下位ともに抽象的な図、つまりスキーマ図を描く傾向が見られたと言える。Target word に関しては、指導時に見せたスキーマ図の獲得が多くみられ、non-target word に関しても抽象的なスキーマ図を自分なりに描く傾向が見られた。例えば、non-target word の through は、二つの物体の間を矢印で通したり、空間性のある長い筒の中を矢印を通したりと工夫されている。また、along については、線に沿って、矢印を伸ばす図を描いたりしていた。

実験群には、抽象的な図を描いてから、その説得力が増すように具体的な図を描く傾向も見られた。例えば、実験群上位の S20 は、on に関して図2を描いている。

Target word の on が表面（surface）に接していることを説明しながら、「I'm on the ground」「私はグラウンドに立っている・接している」という文例を説明する図を追加している。

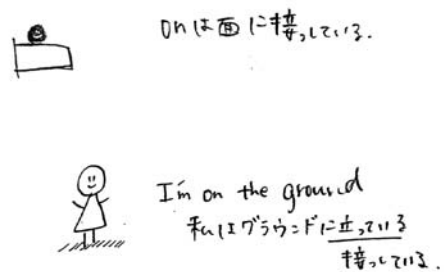


図2 実験群上位 S20が描いた on のイラスト

先に見るように、統制群には、抽象的な図も描かれたが、実験群と比較すると具体的な図のみが多く描か

れたと言える。例としては、図3が全問において抽象的な図を描いた実験群上位が描いた off のスキーマ図であり、図4は何かを説明する具体的な図が多かった統制群上位が描いたガムが剥がれる様子の具体図である。

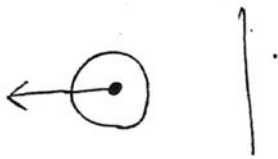


図3 実験群上位 S6が描いた off のイラスト

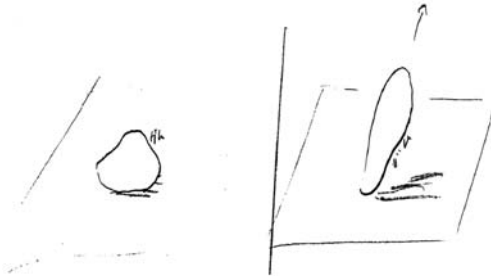


図4 統制群上位 S40が描いた off のイラスト

のちに、統制群 S40にこの図の具体性について質問したところ、以下のように述べた。

off は、そのイメージをしたときにどうしてもガムになってしまうんですね。off っていうと簡単に外れるんじゃなくて、ちょっとプロセスがあってそこから離れていくっていうイメージがある。その時にガムっていうのが浮かぶ。(S40)

また、回答した問のすべて (along, away 以外) を具体図にした統制群 S36は、above, between, in, into, off, on, over は具体図が頭に浮かんだと答えた。階段を下に降りる図である down については、後のインタビューで、階段を下に降りる図を描いたのは「説明するためにです。」と述べている。

総合して考えると、実験群の方が、統制群よりもプロトタイプに限定されず拡張事例へと応用しやすい基本的な抽象イメージを持っている可能性が現れてきた。Target word が特にスキーマ化されているかどうかの可能性は、次の第4節3項2番で述べる研究課題2)において、target word から他の空間表現へと

理解の応用が見られるかの結果を通して検証したい。

4.3.2 Target word から他の空間表現理解への応用

実験群上位・中位には、target word 間での相互理解のみならず、target word から non-target word への拡張が頻繁に見られた。例えば、target word 間同士の理解として、実験群上位 S21の at では、「主に場所を表す前置詞だが、ある一点のことを指す。似たような意味を持つ in もあるが、in はある一定の範囲内のどこかに収まっている状態を示し、at はある一定の範囲内の特定の一点を意味する。」と説明される。ここに出てきた target word である at も in も実験教材に出てきた頻度が高い空間表現である。この他にも空間表現同士で比較されているものは様々にあるが、代表的なものとして、in-into を比較して説明しているのが4名、on-off は2名、on-above は3名、over-above は3名が挙げられる。Non-target word への拡張の例としては、例えば、above を説明するために、上位 S16は target word の on を引用している。「Above はある物が上にあることである。例えば、[on] の場合は図1のようになる。Above は宙に浮いている状態である。」と記述した。ここで述べられる図1は、線に円状の対象物が接している on の図である。Target word の over と non-target word の above に応用する例も見られ、実験群上位 S21は「[超越]ある物の上を越していく。イメージとしては半円形。Above はどちらかという垂直上のイメージ。」と指摘している。後に、S21はインタビューにおいて、以下のように答えている。

英米文学を通して、over の表現が、イメージなら半円を描くイメージがあるじゃないですか。Above と over で訳としては似たような感じなんですけど、その半円が弧を描くイメージなのか、ただ垂直にある上というイメージなのか区別がつくようになりました。(S21)

ここで述べる on から above へ、over から above へと理解が拡張したという意味は、target word により、non-target word の理解が深まったということである。Non-target word の部分的な知識が target word の新知識との相互作用により、理解が深められたと考えることができる。いわば、non-target word が既習事項であったとしても、target word により学習者の中で意味が相対化され、再構築されたと言える。このように、実験群上位・中位は、target word から他の空間表現へと拡張させながら理解を進めている様子が見られた。

一方で、実験群下位には、他の空間表現と比較する記述がほぼ見られず、統制群は、イメージテスト記述において上位1名がon-aboveを、別の上位1名がin-atを比較し、下位1名がインタビューにおいてon-aboveの比較について述べたのみであった。

4.3.3 拡張事例としての心理説明

拡張事例には、心理だけでなく、in a low voice など手段やin a week など時間も存在するが、ここでは、文学的な読みとの関連から、心理説明に焦点を絞る。ここで言う心理説明とは、拡張事例の心理だけでなく、空間表現に動作主の心理的意味合いも含まれる。字義通りの文例が多いため、心理説明は以下2名であり、数は多くないが、心理説明は実験群上位・中位に見られた現象であった。実験群中位 S4は、拡張事例の心理として、読解指導内容に関連する心理記述を行った。

down は、ある対象が低下したり降下したりと下の方向に動いていく動きを表す。He looks down on me. 彼は私を『見下して』いる。Down, down, down. 下へ下へ(どんでん下へ) 文学等の場合は登場人物の心理を表していることも多い。(S4: 下線部は本稿の筆者による追記)

このS4の示す「登場人物の心理」とは、'Down, down, down.' は〈意識が落ちていく〉という心理的意味合いを読み込んでいるように思われる。読解指導の文学教材 *Alice's Adventures in Wonderland* において、日常世界からファンタジー世界へのシフトが起こったと感じ取ったようにも解釈できる。

また、実験群上位 S24はinto について、「into は、物の中に何かがちょうど入っているような状態を示している。例として、『Trains get into the tunnel』電車が、ちょうどトンネルに入って行っているというような意味となる。」との記述に加えて、「物の意味では、物の中に入っていくであるが、人の立場で意味を考えると、感情が読み取りやすい。」と記している。さらに、文章の文脈を考えた上で、「人の意味を考えると『急いで』という意味が付け加えられる。例として、『She gets into the kitchen.』この文の前に彼女をせかさような文があれば、『彼女はキッチンに急いで入った』のような意味が読み取れる。」と追記している。ここでは、「She gets into the kitchen」を例に挙げて、into を言語的掛かりとして、S24自身が動作主の心理的な部分を読み取っていることを示した。このように、実験群上位・中位には、字義通りの意味から、心理的な意味への多義的な拡張が見られた。

5. 考察

研究課題1) target word のスキーマ図では、実験群が統制群よりも抽象的な図を描いたことを示した。次に、研究課題2) target word から他の空間表現理解への応用では、target word から target word へ、さらに target word から non-target word への理解の拡張・相対的認識の様子がうかがえた。最後に、研究課題3) 拡張事例としての心理説明では、字義通りの文例が多いため、数は少ないが、空間表現の心理説明に至っている記述例を示した。

このような結果が出た要因は3点考えられる。第一に、第2節1項に見られるように、読解指導時の劇活動の作業過程で、学習者個々が文学を通じて、こだわりの見せた空間表現をプロトタイプから拡張事例へと応用し、スキーマ形成を強化したと考えられる。読解指導における1) 教師によるスキーマ提示を含んだ空間表現を中心とする文法指導・日本語訳の口頭説明、2) グループ単位での劇発表、3) 映画視聴、4) 学習ポートフォリオの記載の4段階指導のすべてが総合して効果をもたらしたと考えられるが、1) におけるスキーマ提示だけでなく、様々な空間表現の使用場面を踏まえ、空間表現身体化の中心部である劇活動をしたことが特にスキーマ図を描く手助けをしたと考える。3) 映画は、できるだけ文学に忠実だとされる Harris & Zindel (1985, 2010) を使用したものの、実際に文学テキストとは異なった部分もあり、映画が直接的に空間表現のスキーマ化を促したとは考えにくい。映画は、文学テキストの振り返りとしての役割を果たしていた。一方で、劇活動は、文学テキストを読むだけでなく、実際に登場人物の動作や位置を作っていく。いわば、空間表現身体化の根幹部である。劇活動が功を奏したと考えられる以下のインタビューコメントも残されている。

身体的な接しているっていう表現が、イメージがアリスの作品の中に出てきたりしたんで。このシーン、普通にサツで読んでたら、こういう動作しかしてないけど、この手はここに接しているよねっていう。なんていうんですか。物語通して、イメージが繋がったっていうか、深まったっていう感じが多かったんで、印象に強かったのかなと思います。(S6)

つまり、劇活動中において、本人・本人が属するグループ・その他のグループで行った空間表現を基にした動作が印象に残ったと考えられる。

第二に、第2節2項の文学的な読みである。文学的な読みは、ある空間表現がどうして使用されているのかをその効果を検討する読みである。授業後に収集した学習ポートフォリオには、指導7回目あたりから、なぜある空間表現が使用されているのかを考察する記述が増えていった。最終指導回では、多くの協力者が、空間表現を基にした動作・位置関係から心理を考察するようになってきている(熊田, 2014)。心理的な拡張事例を学習者個々が毎回の指導で多様に生み出したことで、スキーマが柔軟化し、スキーマ形成が一層進んだと考えられる。

第三に、インタビューにおいて、本読解指導が他の英語学習に影響したかという問を実験群にしたところ、会話・文章読解・英作文時に空間表現を気に留めるようになったとの返答が返ってきた。S21は以下のように述べていた。

前置詞中心で教えてもらってたんで、読むのもそうですけど、書くときとかライティングにおいても、正確に合ってるかわかんないですけど、たぶんこれだよなってすぐ出てくるようにはなりました。あと、前置詞に対するコンプレックスもなくなりました。(S21)

読解指導後もそれぞれが英語学習を続け、英語学習の際に、空間表現についての気づきを拡大し、その考えを深めるようになったことも一つの理由であろう。

以上のような肯定的な結果とその根拠がある一方で、文例が字義通りの意味に留まったものの方が多かった点は検討の余地がある。第4節3項3番の心理説明だけでなく、時間などの拡張事例を書くに至らずに字義通りの意味に留まった target word の文例は、およそ7割である。この点は、スキーマ図が描けても、拡張事例を産出するまでには至らなかったことを示している。

考えられる理由として、第一に、16問と問数が多かったため、イメージテストの実施時間(40分程度)が足りなかった点、第二に、手本の書き方に問題があった点が、拡張事例の産出に至らなかった可能性として浮上してきている。前者に関しては、テスト終了後じっくり書く時間が足りなかったと述べたものがいた。後者については、手本として(資料1)、本稿の筆者が物理的でプロトタイプ的な意味を最初に書き、その後に拡張事例を添えるように書いた。プロトタイプ的な意味だけでなく、拡張事例までを書くようにと指示しなかった点に問題があったと考えている。つまり、スキーマ図を描き、物理的な文例を書いたのみで満足し

た協力者が多かったのではないだろうか。

今後の課題として、拡張事例の産出について再検討するために、イメージテストと同時にいったん文学読解テスト結果を分析する必要がある。文学読解テストは、文学教材の一部を題材とし、①登場人物の位置関係や動き、②登場人物の位置関係や動きから読みとれる二人の心理関係、③その他の気づきについて自由記述する形式である。実際に、空間表現に焦点を絞った記述や、人物の動作から心理を考察する記述が見られたことから、文学読解テスト結果は、今回の結果を補完できると予測している。

6. おわりに

本稿は、空間表現身体化の定着について、3点の研究課題を検討した。文学の多彩な空間表現が、そこにこだわって試みていくことで文学の読みを深め、その文学的な読みの向上が今度は空間表現を一層深く理解していくことにつながったことが分かった。さらに言えば、指導直後に気づかされたスキーマは、5節で述べた会話・文章読解・英作文のような他の英語学習影響にもつながり、相互に影響しあいながら強化され、第4節3項で示されたように今回のような一定の成果をもたらした。本稿では、文学を用い、劇のパフォーマンスを経ることにより、日本人学習者にとって習得するのが難しいとされる空間表現身体化を強化していく過程を示せたと考えている。今後は、遅延テストとして同時に行った文学読解テストの結果を検証し、本稿の結果を一層精緻なものにしていきたい。

【参考文献】

- Carroll, L. (1865). *Alice's adventures in wonderland*. Retrieved from Project Gutenberg, <http://www.gutenberg.org/>
- Carter, R. (2007). Literature and language teaching 1986-2006: A review. *International Journal of Applied Linguistics*, 17 (1), 3-13.
- Gibbs, Jr. R. W. (2005). *Embodiment and cognitive science*. New York: Cambridge University Press.
- Harris, H. (Director), & Zindel, P. (Writer). (1985, 2010). *Alice in wonderland* [Motion Picture]. United States: CPT Holdings, Inc. (『不思議の国のアリス』. 東京: ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント.)
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. The University of Chicago Press. (渡部昇一, 他訳. 『レトリックと人生』. 東京: 大修館書店.

- 1986年.)
- Lakoff, G., & Turner, M. (1989). *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor*. The University of Chicago Press.
- Langacker, R.W. (1987). *Foundations of cognitive grammar: Theoretical prerequisites, Vol.1*. California: Stanford University Press.
- Leech, G., & Short, M. (2007). *Style in fiction: A linguistic introduction to English fictional prose (2nd ed.)*. Harlow: Longman. (笈壽雄監修.『小説の文体: 英米小説への言語学的アプローチ』. 東京: 研究社. 2003年. 初版原著翻訳.)
- Leech, G., & Svartvik, J. (2002). *A communicative grammar of English (3rd ed.)*. Harlow: Pearson Education. (池上恵子訳.『現代英語文法-〈コミュニケーション編〉新版』. 東京: 紀伊国屋書店. 1998年. 初版・第2版原著翻訳.)
- Stockwell, P. (2002). *Cognitive poetics: An introduction*. London & New York: Routledge.
- Tyler, A. (2012). *Cognitive linguistics and second language learning: Theoretical basics and experimental evidence*. New York & London: Routledge.
- Tyler, A., & Evans, V. (2003). *The semantics of English prepositions*. New York: Cambridge University Press. (国広哲弥監訳『英語前置詞の意味論』. 東京: 研究社. 2005年.)
- 安藤貞雄. (2012).『英語の前置詞』. 東京: 開拓社.
- 熊田岐子. (2013a).「空間表現の身体的理解による英語文学読解指導」.『第39回全国英語教育学会北海道研究大会発表予稿集』, 全国英語教育学会, 468-469.
- 熊田岐子. (2013b).「空間表現の身体化による文学的な読みの深まり」.『日本教科教育学会全国大会発表論文集39』, 日本教科教育学会, 130-131.
- 熊田岐子. (2014).「文学の描写を明示・暗示する映画

の教育的応用」.『映画英語教育研究』. 第19号. 映画英語教育学会. 137-151.

鈴木淳子. (2002).『調査的面接の技法』. 京都: ナカニシヤ出版.

瀬戸賢一. (1995).『空間のレトリック』. 東京: 海鳴社.

瀬戸賢一. (2007).『英語多義ネットワーク辞典』. 東京: 小学館.

山梨正明. (2000).『認知言語学原理』. 東京: くろしお出版.

山梨正明. (2012).『認知意味論研究』. 東京: 研究社.

【資料】

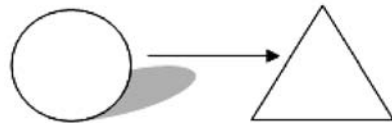
資料1 空間表現イメージテスト例題

以下に提示した前置詞(副詞)について, あなたはどのようなイメージを持っていますか? 下記の例を参考にしながら, 図と文例を用いて説明してください。

例) toward

【何かに向かって, 向けて】

向かっている



Toward は, ある対象や場所(△)に, ある物や人(○)が向かう方向性を表している語である。物理的に, He's walking toward the river. と彼が「海に向かって」歩いているという意味を作る。さらに, 物理的な【何かに向かって, 向けて】から派生して, 目標の意味になると They're saving money toward a new house. などと「新居を建てるために」となる。